

津波と放射能被害の福島に行く

増田 善信

私は今年の2月末に狛江市の仲間5名と「狛江の放射能を測る会」を作り、月1回、狛江市内30数カ所の放射能の測定を行っているが、その中の3名と一緒に4月2〜4日、いわき市の大津波の被害の調査と、福島第1原発の20km圏近くを通る国道399号線沿いの放射能測定を行って、福島県民の抱えている問題を垣間見えた。これはその概要である。

大まかな日程

4月2日、いわき市に直行し、全気象の専従や小名浜測候所にも務めた経験もある島田栄二郎氏と原発問題住民運動全国連絡センターの筆頭代表伊東達也氏の案内で、元小名浜測候所を手始めに小名浜・塩屋崎・薄磯などの津波被害を調査した後、6号線を20km圏の南端の検問所があるJビレッジの入り口まで北上して放射能の測定を行った。

4日はまだ風も強く、小雪も舞っていたが、9時過ぎに宿を出発し、伊達市、霊山町、飯舘村、浪江町、葛尾村と高放射能地域を測定しながら前日測定した都路まで南下し、ほぼ399号線の空間線量を測定し終えた。その後は三春を経て磐越・常磐自動車道を使って午後7時半ころ帰京した。

元小名浜測候所は

3日はNPO「ザ・ピープル」理事長吉田恵美子氏から活動状況を聞いたのち、楢葉町と双葉町の仮設住宅を見学して複雑な被災者の状況に触れ、その後市民放射能測定室「たちね」に案内してもらった。午後3時ころいわき市を出発。いわき平から399号線に入り、所々で測定しながら峠越えし、20km圏のぎりぎりのところを川内、都路と進んだ。しかし、当日は台風並みの暴風雨が吹き荒れた日で、風雨が強くなってきたので288号線を三春方面にとり、猛烈な嵐について磐越・東北両高速道路を通じて福島市飯坂温泉に向かった。

飯坂の宿には、元気象庁電子計算室と一緒に勤務した渡邊明福島大学副学長が、嵐の中をお寿司やお酒などたくさん差し入れを持って来てくれ、2時間半にわたって福島大学の除染問題などを詳し

く話してくれた。

2009年5月14、15の両日

「福島観光と気象官署巡り」の旅に参加した春秋会の皆さんはご存知と思うが、小名浜測候所は廃止されアメダスに変わっていて、元の庁舎は小名浜地方合同庁舎になっている。庁舎は2mくらい盛り土した上に建っており、露場にはかなり太い桜の標本木が植えられている。

庁舎の側壁には津波の跡が残っていた。およそ露場の 90cm にまで達していた。露場の海拔は3Bといわれるので、 3.6m の津波が襲ったことになる。前回の旅行の時我々が食事をした店や深海魚などを買った店はすべて流されていて何一つ無く、港まで見通せる状態であった。

島田氏によると、測候所跡は約2Bの盛り土がしてあるので、津波によって打ち上げられた船やコンテナがせき止められ、うずたかく堆積していて、目も当てられない

い状態であったという。

まだ桜は咲いていなかったが、津波を被ったにもかかわらず元気なつぼみが膨らんでいた。帰京して数日経ったテレビで、昨年は津波の被害でそれどころでなく、中止していた開花予想を気象庁のOBがボランティアで1年ぶりに発表したというニュースが流れた。

桜の開花予想は小名浜測候所の時代はもちろん実施されていたが、測候所が廃止されたため中断されていた。しかし、主にいわき市に住む気象庁のOBが話し合って数年前に復活し、今では地元でも大変期待されているという。1年ぶりの復活は、過酷な津波被害の中で心温まるニュースであった。

豊間中学と瓦礫の山

小名浜から豊間海岸、塩屋崎、薄磯海岸の津波被害を見てきた。塩屋崎灯台の南側が豊間地区で、北側が薄磯地区である。かつては最も美しい海水浴場だったそうだが、いわき市で津波の被害が大きいくところだという。遠浅の海岸のため津波の速度が次々と遅くなつて、壁のようになって襲いかかったためであろう。

塩屋崎灯台は「日本の灯台50選」にも選ばれた美しい灯台で、木下恵介監督の「喜びも悲しみも幾歳月」や、美空ひばりの「みだれ髪」で有名で、「みだれ髪」の歌碑があり、歌が流れていた。その

北に薄磯地区があり、そこに豊間中学があった。驚いたのは豊間中学の体育館で、床から4^Bはあると思われる高さのところに時計が残っていた。その針は津波が到達したであろう時刻3時28分で止まっていた。津波はその時計の直ぐ下まで達していたようで、すべてのものが流されて全く何も無い空洞の体育館の板がこいの残骸が風に揺れていた。プールを一部残して校庭全体に瓦礫がうずたかく積まれていた。放射能に汚染されているので、手をつけられないのだという。



津波の来襲時刻を示した時計

広野駅とタクシーの運ちゃん

20 km 圏の南端の検問所まで行った。そこは檜葉町の南端でもあり、東電が130億円もかけて地元への「お礼に」作ったサッカー場「Jビレッジ」の入り口でもあった。数年前に一度行ったことがあるが、11面の天然芝のピッチを持つわが国最大規模のサッカーのトレーニング施設で、サッカーの日本代表も練習に使っていたが、今は「原子力ムラ」の大企業の前線基地になっているそうだ。

そのすぐ南は広野町で常磐線は広野駅まで開通している。駅前に若いタクシーの運ちゃんが3人たむろしていた。列車が着くたびに、作業員をJビレッジに運ぶのだそうだ。広野町は昨年9月に帰

村宣言したが、250人しか戻っていないと聞いていたので、運ちゃんに聞くと「250人？昼だけだよ。夜は誰もいないね。だって、店が一軒しかないから住めやしないよ。町長だって住んでないんだ。勿来の仮設住宅から役場に通ってるんだよ。それで戻れたって戻れないよ。生活できないからな。仕事もないし、特にお年寄りも農業ができないからやることないんだよ。帰りたいっていったって、帰れないんだよ」とこもこも語ってくれた。

常磐線も東電から圧力があって開通したという。駅の時刻表を見ておどろいた。広野駅発の列車が1日9本あったが、朝の8時台の水戸行きと9時台の高萩行きの2本を除いて、全部いわき行きであった。

タクシーの運ちゃんによると、広野町の避難解除だって東電のためだそうだ。「あのアパートは三菱重工が作業員のために借り上げているものだが、避難解除はそのためだよ」と大きなアパートを指さしている。放射能が高いというので、除染はどうかと聞くと、「除染？格好だけね。昨年の9月に戻ったけど、2カ月後にやったよ。だけど水撒くだけね。除染も東電のためだよ」という。放射能を測ると0.36 μ Sv/hもあったので「線量高いよ。大丈夫？」と言うと、「今ごろ言われてもね、ずっといるんだから・・・」。

避難解除というのなら、除染は当然だが、住民が生活できる店や病院、そして最小限の仕事を与えることが先ではないかと思った。

避難民の複雑な状況と「戯れ歌」

いわき市は香川県の4分の3ほどもある大きな都市で人口は34万人。原発事故で避難してきている人は、正式発表で約2万2千人、親戚を頼ってきている人たちも入れると3万人くらいだという。一方、津波被害や放射能を恐れて流出した人が約7千人あるという。いわき市は3・11の地震による被害はほとんどなかったが、一カ月後の震度6弱の直下型地震の被害が大きかった。しかし、それも場所によって違い、しかも本場の被災者は局部的なので、市民との一体感が薄いという。

高台になっている中央台という所に建てられている仮設住宅を見学した。震災前はニュータウンを建設中だったので広大な更地が残っていたのだそうだが、そこに檜葉町と双葉町の仮設住宅が建てられていた。ところが町によって仮設のつくりが違のた。檜葉町はプレハブで、双葉町は木造の仮設だった。双葉町は放射能の汚染がひどくて当分は帰れないから木造になったのだそうだが、暖かそうな木造と寒々としたプレハブが同じ場所に建っているのを見て避難者はどんな気持ちで入居しているのだろうと暗然とした気持ちになった。

しかも、金のある人は直ぐそばの空いている土地に1戸建ての家を建てて移っていくのだという。視覚的にも格差そのものだった。ゴミの出し方から車の止め方まで様々で、みんなストレスが溜まってくる。パチンコ屋はいつも満員だという。「働くより、補償金ももらって暮らす方が楽だ」と言っている親を見て育った子どもがどう

なるかとても心配だという声があり、仮設で暮らす母親の中には、働く気にもなれず、包丁を持たなくなり外食に頼る人もでて、外食産業が繁盛しているという。これは福島市で聞いた話だが、子どもたちは勉強する部屋もないので、遊ぶしかなく、不良化して酒やタバコに手を出す子が出ているという。こういう状況の中で戦争中の「兵隊さんのおかげです」をじつた「戯れ歌」が唄われているという話を聞いてやるせない気持ちになった。

拝啓 東京電力殿

仮設でパチンコできるのも

東電さんのおかげです

仮設で涙流すのも

東電さんのおかげです

東電さんよ ありがとうございます

戯れ歌

“たらちね”放射能市民測定室

いわき市の放射能のピークは昨年3月15日と16日、21日の3回あり、最大の放射性プルームが通過したのが15日午前4時で、23・72μSv/h あったそうだった。これが通学時だったらと思うとゾッとするが、この数値は県の合同庁舎前の測定で、伊東さんが手に入れたのは二カ月後だったという。ここでも情報遅れが被害を大きくしていることがわかった。

市民による放射能測定室“たらちね”は、昨年11月13日に開所、現在食品の測定器4台、WBC（ホールボディカウンター）1台を使って市民が持ってきた食べ物・土壌、そして身体を測っている。食品は一点500円、30分くらいで測れる。水は3時間。WBCは3分くらいで1回大人50

00円、こども1000円、2回目から半額。食品は今までに約1200件、WBCは1800人程度測定したそうだった。最近では土壌を持つてくる人が増えたという。

“たらちね”の近傍は0.5μSv/h 位だったので、「このあたりは除染されていないのですか」と尋ねると、「この程度のところはたくさんあるから、基準より上だからといって除染申請しても、優先順位があるので、順番が来るころには下がってしまいますよ」という答えだった。



ホールボディカウンター

WBCも食料測定器も周りにペットボトルの壁がつくってあった。ノイズを消すために鉛の代わりに水を使っているのだという。WBCは椅子に座って測るようになっていて、背もたれのお腹辺りのところに測定器のセンサーがあった。いわきオーガニックコットンプロジェクト

NPO「ザ・ピープル」は、避難民の心のケアも必要だと、復興ボランティアセンターを立ち上げ、色々の集まりを主催したり、温泉ツアーをやったり、東京からの「援農ツアー」を企画したりしてきた。その中で、農業から切り離された人たちに農業で元気になつてもらおうと作ったプロジェクトこれである。

有機の綿の栽培を市内10カ所で行うというもので、信州大学の協力を得て体験学習を重ね、昨年12月に発足した。信州大学から種の提供を受け、5月に種蒔き、秋に収穫の予定だという。

4月29日発行の最新の「いわき震災通信 Vol.37」によると、4月28日から始まる連休を利用して首都圏からボランティアがやってきて、いわき市遠野町為朝集落で、種蒔きには少し早いので、ポット蒔きと栽培予定地の準備作業を行っているという。

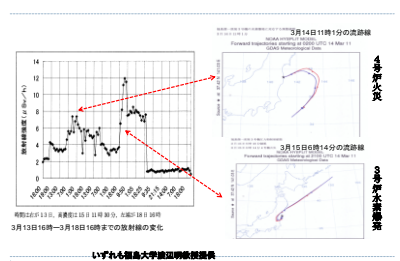
いわき市の山間地にあるこの地域は、昨年の3・11には大きな被害はなかったが、その直後の4月11日の直下型地震の大断層で大きく動き、簡易水道の水脈が枯渇、今でも別の地域の水道からタンクで水を運んでいるところだという。中山間地だけでなく津波で被害を受けた久之浜町の小中学校でもプラントで栽培する計画もあるという。このプロジェクトが希望の芽を出してくれる日を期待して帰ってきた。

初めての放射性粒子の流れの予測

3日の夜は、福島大学の渡邊氏がお寿司、つまみ、お酒などたくさん差し入れを持って嵐の中を宿まで来てくれた。彼は東京航空気象台から電子計算室に転勤してきて、私と同じ職場で働くようになり、現業勤務をしながら東京都立大学（現首都大学東京）の大学院に通って、修士課程修了後福島大学に移った人である。彼は現在福島大学の副学長として、大学の復興問題や除染問題の中心になつて活動しており、貴重な話をして

くれた。

放射能汚染は何処まで広がったか



渡邊明福島大学副学長が
SPEEDIで求めた流跡線

この図は渡邊氏の許可を得て私が「原発事故と放射線の脅威」で講演するときに使うパワーポイントの図から転載したものだ。彼は恐らく日本で最初に放射線を測定した人であると思う。3・11の直後の昨年3月13日18時から測定を始め、4号炉が火災を起こした3月14日と、3号炉が水素爆発をした15日の強い放射線を測定したうえ、NOAAのHYSPRINTモデルを使って、放射性粒子の流れ（流跡線）を求めて発表した。特に15日の放射能が最初は北東の風で南西に流れて東京付近まで汚染し、その後反転して、茨城、福島東部まで汚染したことを明らかにした。もしこれがもつと多くの人の目に触れ、政府がそれによってヨウ素剤配布などで対処すれば、被害はもつと軽減されていたであろう。この図は彼の許可を得て私が「原発事故と放射線の脅威」の講演で使っているパワーポイントの図を示したものである。

ところが3月18日に日本気象学会理事長新野宏氏が「当学会の気象学・大気科学の関係者が不確実性を伴う情報を提供、あるいは不用意に一般に伝わりかねない手段で交換することは、徒に国の

防災対策に関する情報等を混乱させることになりかねません」との会員宛メッセージを出してこの研究にケチをつけたのである。しかし、これは新野氏が弁明せざるを得ないほど社会的問題になった。昨年5月の日本気象学会春季大会の総会での経過報告の中で、新野氏はこの問題に軽く触れただけであったので、私は「科学者の社会的責任と学問の自由の問題から、この会員あてメッセージは適切ではなかった」という趣旨の意見を述べた。すると3人の人がほぼ同じような発言を行い、私の発言を支持してくれた。その結果、もちろん「採決した」わけではないが、総会としては「理事長のメッセージは好ましくなかった」ということになったと思う。

放射能に対する福島大学の取り組み



渡邊氏のホームページより

渡邊氏が何故いち早く放射線の測定を行ったか。3月11日19時には、1号炉の冷却水がなくなり、原子炉の空焚きがおこっていることは、約1万人の地元の原発労働者にはわかっていて、それぞれ家族に「逃げろ」と電話して来ていたからだという。彼は前述のように事故直後から放射能の流れを調べ、福島市や飯舘村が強く汚染されていることを発表したが、日本気象学会理事長に「人心を惑

わすことを言うな」と抑えられたのだ。政府の公式の発表はなく、結局、飯舘村のように情報が二転三転したり、浪江町赤宇木などは当初物凄い線量(1500μSv/h)が測られていたのに公表されなかったため、その20km圏内の人が避難するという事態さえおこってしまった。

彼は政府が情報を隠した部分と無知の部分が被害を大きくしたと言っていた。情報隠しという点で言えば、国や県が放射線の測定値を得る原発近くのモニタリングスポットは、12日夜には復旧していたが、原子力安全委員会は「事実が分からないから言わなかった」と言って発表を抑えた。しかし、「高い」とか「低い」とかだけでも言うべきだったと思う。

無知の例で言えば、郡山市の3月15日の放射線の強さは低かった。それは建物の三階の窓から測定器を出して測ったものだったからだ。何故そんな馬鹿なことが起ったかという、空間線量だから何処で測ってもいいと思っていたという。

9月に子どもたちの被曝度を調べたが、ここにも大きな「格差」があることがわかった。住居によって被曝度に歴然とした差が出ていた。立派なマンションに住んでいる人、普通の家屋に住んでいる人、バラックに住んでいる人で、きれいに三段階に分かれた。大学でも教授は逃げて他の職場に行くことができるが、職員はそうはいかない。常にこういうことを考えて対処したという。

放射能の話は深刻だったという。連日のように父兄から「大学は大

丈夫か」という電話があり、中には「大学を移転させろ」と一晩中電話で要求する人もあった。それを説得するのは大変だったが、2億5000万円かけて大学の敷地を含めて大学全体を除染し、安心させていったと話していた。

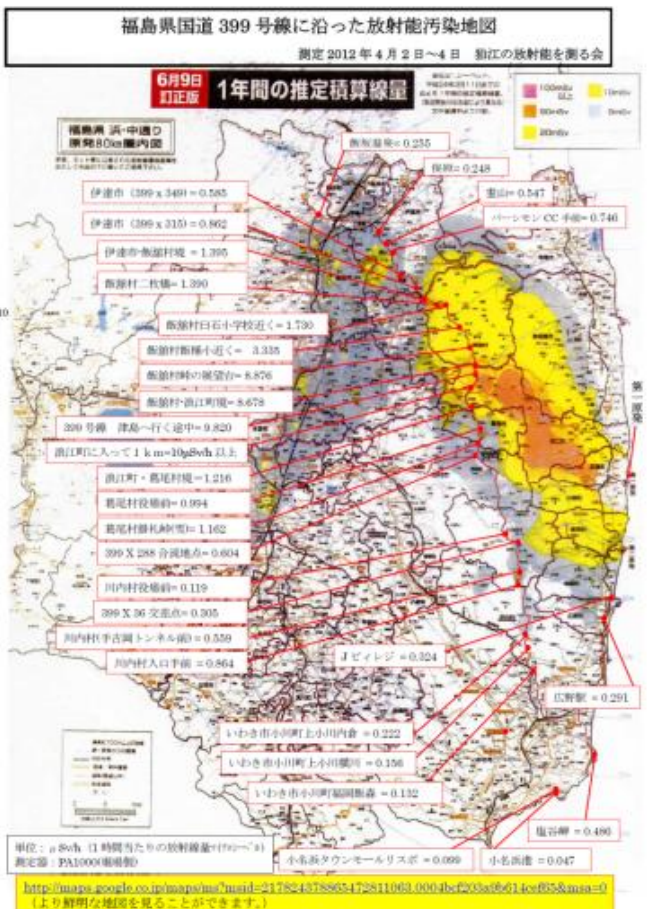
福島大学で最も心配したのは、今年の入学生が集まるかどうかであった。先生方が手分けして高校を回り福島大学へ来てくれるように頼んだのだそうだ。渡邊氏自身も多くの高校を回って、学問の重要性と地元の大学を残す必要性を訴えた。おかげで、今年の受験生は昨年以上の倍率になり、特にうれしかったことは、福島県出身者が60%を超えたことだという。

渡邊氏は色々辛い経験の中で、「心に残る体験」をしたことも話してくれた。福島大学でも被災した学生がたくさんいるが、この春卒業したある女子学生は、津波で父母を亡くし、もし父母が生きていたら、振袖姿で卒業できたはずだったと思うが、ジャージ姿で卒業していった。しかし、卒業するまで、ずっと大学に避難してきていた避難民の面倒を見続けていて、「こういうことができて本当に良かった」と言っていて卒業していったという。

また、大学で避難生活を送っていたある老人は、その老人の孫が今年福島大学に入学したが、「おじいちゃんには避難のために孫より一足先に大学に入ったが、大学に本当によくしてもらった」と言って、余裕のないのに十数万円を出して植樹をしてくれたという。学生たちは学生たちで、ボランティアをするので確実に色々なことを学

んでいるとおもうと語ってくれた。

村の峠の展望台では8・876



困難な中でも着実に復興の道筋を立てて頑張っている姿を垣間見た気がした。

国道339号線の汚染状況

図は4月2日と3日に実施した国道399号線に沿った放射線の測定結果をまとめたものである。小名浜付近は恐らく除染した結果であろうが、浪江市とそれほど変わらない値だった。いわき市、福島市で浪江の3〜4倍、伊達市でも国道288号線との合流点以南では相対的に低く、川内村役場はせいぜい浪江の2倍程度であった。私は以前から川内村は早く帰村させた方がよいと主張していたが、それが裏付けられた感じがした。全村避難している葛尾村役場が低くなってきているのは、某大企業が役場の庁舎を借用しており、恐らく除染をした結果であると思う。

なんと言っても汚染がひどいのは飯館村と浪江町で、その中でも特に放射線が高かったのは山の稜線付近で、峠を越える度に高い放射線が測定された。例えば、飯館

Sv/hで、飯館村から浪江町に1km位入った峠にさしかかると、9・8μSv/hを超え、ついにスケールオーバー(10μSv/h)してしまった。これは文科省の汚染地図からも推定されることで、今回の原発事故による放射線が主として山の中腹以上を強く汚染しているからだと思う。

脱原発に向けて

原発問題住民運動全国連絡センターの伊東さんの話によると、福島県内59自治体の中で37自治体が原発廃炉決議を上げているという。しかし、被曝の被害を最も受けている中心地域では、浪江・飯館・南相馬しか決議していない。住民の声を纏める共産党などの組織が、原発誘致の流の中で完全に潰されてしまったのが大きいという。

福島第2原発を誘致する頃から、立地町でも誘致を掲げる「市民運動」がつけられ、そこへ住民が上手く纏められ、反対派の「住民運動」と対立させられていった。誘致派の「市民運動」は、議員が先

頭にたつて各戸を回り、ポスティングし、それをマスコミが応援した。その中で、同じ原発なのに、社会党と共産党が対立して分裂してしまった。檜葉町では、1973年に初めて公聴会を開くことに成功したが、社会党などが「ごまかしの公聴会粉碎」を叫んでぶちこわしてしまった。これで分裂し、結局政府・東電の思う壺にされてしまった。

原発反対の中心になっていたのは先生、特に高校の先生であった。しかし、ここも教育委員会、父兄さらに「原子力ムラ」の総力を挙げた攻撃によって、孤立させられていった。最後まで残ったのが今原発問題住民運動全国連絡センターの代表委員をしている早川篤雄氏を中心とした人々である。彼は檜葉町の宝鏡寺というお寺の住職で、私はチェルノブイリへ2回一緒にした関係でよく知っているが、

「福島県九条の会」の機関誌(N O・14 2011年4月6日)に、「原発震災、パニック体験」という一文を寄せている。そこで彼は「原発反対の住民運動を始めて3年、チェルノブイリを2回訪れ目の当たりにした光景が、そのままが身の現実となった。この加害者は、政府と東電と原発推進学者と、それに一般マスコミだ」と述べている。

今、廃炉の4基を含めて、54基の原発すべてが停止するという状況の中で、「原発再稼働」か「原発ゼロ」かで国論が2分している。あれだけの大きな事故を起こした福島第1原発の周辺自治体でも「原発廃炉決議」が上がらないのは何故か。それは原発は危険ではあるが、地域経済や雇用の面で不安があるからであると思う。

事実、原発立地の地域は、過疎地であり、経済的に後進地域であ

る。そこへ「原子力ムラ」の安全神話と札束が襲いかかつてこれだけの数の原発になったのである。その意味で地域経済をどう立て直すかは、「原発ゼロ」の運動にとっても重要な課題であると思う。

私はかつてアメリカ・カリフォルニア・サクラメント近郊のランチョセコ原発の解体現場を見学した。原発を廃炉にするには、そこそこの遠くなるような時間と労力・資金がいるのである。今までのようなあぶく銭ではなく、実質的な資金を投入して廃炉事業を実施させ、地域の雇用と経済を立て直し、全原発の廃炉を進めて、「原発ゼロ」の日本を作る必要があると思う。このことを痛感した今回の旅であった。

(2012・5・1)